

優秀賞

新・読み聞かせスタイル

黒河内 葉子

おなかに赤ちゃんがいるとわかった時から、ずっと楽しみだったのが、「読み聞かせ」でした。私自身小さい頃から絵本が大好き、昔読んだなつかしい絵本と一緒に読み返すのも、はじめての絵本を開くときを共有するのも、どちらもとても楽しみでした。

誕生した長男への初めての一冊は、「ノンタンにんにんにこにこ」でした。ノンタンの表情にあわせて、私も顔を七変化させていたら、いつの間にか絵本より私の顔ばかりを見つめるようになってしまったのも懐かしい思い出です。一歳を過ぎた

頃からは、自分でも舌を出したり歯を見せたり、表情をまねるようになってきて、成長を嬉しく思いました。

気に入った絵本は何度も何度も読みますが、回数を重ねても、物語が正確に伝わっているとは限らないな、と思うこともしばしばでした。「ねむねむパジャマ」は、はりねずみのお裁縫やさんが、眠れないお客さんのために、羊のようなもここのパジャマを作り、村の動物たちに大ヒットする、というかわいらしいお話です。長男はとても気に入って、「ちくちくのあわあわのおはなし」と呼んでいました。でも、ちくちくはりねずみのことでよいとしても、もここのパジャマは泡ではないですよ。そのずれがおかしくて可愛くて、子供が絵本を読んで脳内に広げているイメージ、そ

れ自体が、絵本に負けなくらいのファンタジー
だなあと思った出来事でした。

そんな楽しい読み聞かせの日々が突然終了した
のです。長男が五歳の時、一字ずつ字を指し示し
ながら読んでほしい、と望むようになり、それを
繰り返すことで、あつという間に字が読めるよう
になりました。それ以来、自分で読みたいから、
と読み聞かせを断るようになったのです。自分で
読む楽しさを得てよかったなと思う反面、淋しさ
もありました。

しかし、一年程たった頃、絵本に飽きを感じ始
めたようでした。字の少ない絵本には物足りなさ
を感じるけれども、絵の少ない児童書にはまだ抵
抗がある、そんな狭間の時期を迎えたのです。久
しぶりに出番かしら、と私は燃えました。絵本と

同じくらい、児童文学にも思い入れがあります。

絵本から児童文学への橋渡しをすべく、新しい読
み聞かせスタイルを始めました。

それは、寝る前のひと時、長男と三歳下の次男
と布団に寝転び、灯りを消して始めます。昼間の
うちに私が読んで予習しておいた物語を、アカペ
ラで語るのです。自分が好きな場面は自ずと力が
入りますし、逆にすっかり抜かしてしまう箇所も
出てきます。演者である私次第で、お話の面白さ
がだいぶ左右されてしまいますが、暗いなか耳を
澄まして聞くお話に、息子達は夢中になりました。

リンドグレーンの作品達も人気でしたが、何よ
りはまったのは「ツバメ号とアマゾン号」シリー
ズでした。父や叔父が大ファンで、カバーに入っ
た全巻が実家にありましたが、子供の頃の私は読

まずじまいでした。しかし、新しいスタイルでの読み聞かせを始め、実家で本を物色していたときに、ふと手にとり、その冒頭にすっかりやられてしまったのでした。七歳のロジャーが、自分が帆船になったつもりでジグザグに坂を登っていく場面です。男の子特有の生真面目な愛らしさが溢れる描写に、自分が男の子の母になったからなのでしょうが、とても感動したのです。そこから全十二巻を、息子達とともに楽しみました。長男は、お話が面白かった日の翌日には、自らその箇所を読むようになりました。小さな次男も、分厚いハードカバーの本を繰って、挿絵を眺めては、お話を反芻するようになりました。児童文学への橋渡し、大成功です。

日はくるのでしょうか。時に形を変えつつ、夢あるお話を息子達と共有できる日々を、存分に堪能したいと思っています。

この新・読み聞かせスタイル、さらに進化する